



Title	フランス17世紀における市民階級の女性 : Madame de La Sablièreの場合
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 1968, 19, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80308
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス17世紀における市民階級の女性

— Madame de La Sablière の場合 —

赤 木 富 美 子

La femme de la Bourgeoisie au 17^e siècle

— Madame de La Sablière —

Fumiko Akagi

Au cours de nos recherches précédentes sur Mme de Lambert, nous avons montré qu'en certains salons intellectuels, les femmes avaient accès aux études de toutes sortes, à condition qu'elles ne perdent pas leurs qualités féminines: agrément, humilité, sensibilité etc.

Mme de Lambert avait proposé comme idéal Mme de La Sablière douée de toutes les qualités de femme et ayant acquis une profonde science. Nous avons donc étudié le milieu où Mme de La Sablière avait vécu et nous avons précisé les conditions dans lesquelles une femme bourgeoise avait pu passer une vie si intellectuelle.

Ensuite nous avons dégagé la conception de la femme parfaite, c'est-à-dire de la femme "qui a beauté d'homme et grâce de femme" acceptée dans l'entourage de Mme de La Sablière.

Nous avons ainsi prouvé une tradition de la femme parfaite, identique, dans les salons du 17^e siècle dont celui de Mme de La Sablière fut le plus brillant et dans ceux du siècle suivant dont le plus intellectuel est celui de Mme de Lambert.

前号では18世紀初頭の女性論として, M^{me} de Lambert のそれを取りあげたのであるが, この夫人が女性の学問を擁護するために, 描いてみせた理想像は注目に価すると思われた。女性が自然に備えているすぐれた感受性の上に, 学問によってその知性を開発するなら, 男性には見られない完璧な人間ができる可能性があるというのがそれで, 夫人はこの説の支持者として Sainte Evremond を持出し, 具体例として M^{me} de Sablière をあげたのだった⁽¹⁾。最近の Deloffre の

註 (1) "Une Dame qui a été un modèle d'agrément sert de preuve à ce que j'avance. Tous ceux qui l'ont connue conviennent que c'était la plus séduisante personne du monde, et que les goûts, ou plutôt les passions se rendoient maître de son imagination et de sa raison, de manière que ses goûts étoient toujours justifiés par sa raison, et respectés par ses amis"

研究 *Guilleragues épistolier* によって、M^{me} de Lambert が一世代前の彼女の理想像、M^{me} de La Sablière に実際に会っていたことが発見された⁽²⁾のは大きな収獲であるが、それだけでなく M^{me} de Lambert がこのような理想像を大きくかかげる背景には、それが、この兩世紀にわたって存在したある、知的グループの人々に共通な理想だったという事実があるのではないだろうか。そうだとすれば、女性の知的活動に対する一つの共通な考え方がそこから導き出せるのではないだろうか。このことの一つの証明として Deloffre の仮説がある⁽³⁾。彼は、文体の面からであるが、Nouvelle Préciosité とよばれる M^{me} de Lambert とそのサロンの常連の好みの源を求め、Préciosité—M^{me} de La Sablière のサロン—Nouvelle Préciosité という系列を想定しているのである。そこで文体の面だけの継続でなく、このグループの流れの中には、女性についても、共通の支配的な観念があったという推測が成立するのである。今回はこの推測の系列を裏付ける第一歩として、M^{me} de La Sablière がどの様に同時代人に受けとられたかを中心に調べてみたい。17世紀後半が、結婚に際しての女性の人格を主張していた程には、女性の知的開発を認めていなかったことは、既にみたとおりである⁽⁴⁾。M^{me} de la Sablière に対する評価を調べることによって、この時代に女性の学問が、少くとも 認容されるぎりぎりの条件を探し出せると思われるのである。

∴

ところで17世紀のような時代では、M^{me} de La Sablière の属した身分を明らかにしておく必要があるだろう。彼女は、自身の家系から云っても、一方遠縁にも当たっていた夫の家系から云ってもプロテスタントであり、市民階級の出であった⁽⁵⁾。夫の Antoine Rambouillet, sieur de La Sablière はフランスの五大地主の一人で屈指の金融業者である Nicolas Rambouillet の息であったが、それでも、Grande Mademoiselle のような大貴族の目には、M^{me} de La Sablière が「小さな町人女⁽⁶⁾。」としかうつらなかつたのは当然のことである。それゆえ、M^{me} de La Sablière を考える場合、いかに裕福であれ、彼女の生活のすべてを規則していたモラルはあくまで市民階

Oeuvres complètes de Mme de Lambert, éd. 1808, p.172.

“Les femmes ont pour elles une grande autorité: c’est S. Evremond. Quand il a voulu donner un modèle de perfection, il ne l’a pas placé chez les hommes”, *ibid.*, p.172.

註(2) “Poètes galants, philosophes sans Pédanterie, voyageurs et gens du monde, composaient autour d’elle une société d’élite qui prélude incontestablement aux salons du siècle suivant: il est significatif que Madame de Lambert, qui en avait fait partie, ait présidé au premier d’entre eux”, Deloffre, *Guilleragues épistolier*, *Revue d’Histoire littéraire de la France*, 1965, p.610.

(3) “L’intermédiaire nous apparaît maintenant avec évidence: c’est le salon de Mme de la Sablière.” Deloffre, *Une Préciosité nouvelle, Marivaux et le Marivaudage*, 2e édition, 1967, p.611, Addendum.

(4) 拙論「フランス17世紀における市民階級の女性」(大阪外国語大学学報 17号 pp.1—14)

(5) Menjot d’Elbenne, *Madame de La Sablière*, chap. I-III.

(6) *Ibid.*, p.81.

級のそれであったことを忘れてはいけないうろう。しかしこうした町人女をも含めて、当時知的生活の重要な中心となったサロンの女主人は、「無数⁽⁷⁾」だったのであり、しかもそうしたサロンの女主人としては、Grande Mademoiselle も M^{me} de La Sablière としばしば共通の友人を持っていたことも否定出来ない。例えば Rochefort や後に Grande Mademoiselle の夫となった Lauzane も、M^{me} de La Sablière のサロンの常連であった⁽⁸⁾。La Fontaine が、「英雄達、半神達、そして神さえも、」⁽⁹⁾と謳ったように、そのサロンでは、「古い貴族階級が、学問と文学の貴族階級と出会い、この二つの結合はいつも彼女のサロンの栄誉だった」⁽¹⁰⁾のである。Molière が Boileau や Bernier と同席して *Malade imaginaire* の幕間劇をまたたく間に作ったというのもそこであった⁽¹¹⁾。サロンの女主人として貴族を集め、文学者を後援するという役割は当時の社会が喜んで女性に認めたものである。以上の一べつでは、M^{me} de La Sablière は当時無数にいた上流市民階級の一女性にすぎないのであるが、彼女の場合問題となるのは、難しい科学や哲学の領域にまで彼女自身が興味を持ち研究を積んだという点である。まずその学問がどのようなものだったか、賛否両論の中から光をあててみよう。

∴

Molière の *Les Femmes Savantes* のモデルは、いろいろの点で M^{me} de La Sablière と合致しないのであるが、Boileau の Satire X と 5^e Epître の一節が、夫人を目指していることは研究者の一致した意見である⁽¹²⁾。「はじめに槍玉にあがるのは誰だろう。ほら、Roberval が尊敬し、Sauveur が出入するあの女学者だ。どういうわけであの女は、あんなに濁^{ひと}った目をして、つやのない顔をしているのだろう。それはね、皆が云ってるよ、Cassini の計算にもとずいて、雨よけの中で、天体観測儀片手に Jupiter 星を追って一晩中すごしたからだとき。じゃまをしないでおきましょう。あの女の学問は今日は一そう忙しく、まだまだ用事があるらしい。新しい顕微鏡の実験が、Dalancé のところで彼女の前でまもなくあるし、それから胎児と一緒に死んだ女の解剖を Du Vernay のところへ見にゆかねばならぬ。吾等の物好き女の目は、何も逃しはしないの

註(7) A.Adam, *Histoire de la Littérature française au XVII^e siècle*, t. III, p.33.

(8) Menjot d'Elbenne, *op. cit.*, p.81.

(9) J'aurait fait voir à ses pieds des mortels, Et des Héros, des demi-Dieux encore; Même des Dieux”.

(10) 主な人物をあげると

Lauzun, le comte du Lude, Rochefort, Brancas, Tréville, Brienne, Barillon et Bonrepaux, “les deux ambassadeurs de la rue des Petits- Champs”, Saint-dié, d'Hervart, Sourches, Dangeau, Beringhen, Ruvigny, ami de Turenne, Jean Sobiesky, qui fut plutard roi de Pologne, La Fare, Charleval, Chaulieu, Saint-Evremont, Vergier, Chapelle, Molière, Racine, Huet, Charles Perrault, Pelisson, Conrart, Fontenelle, Benserade, La Fontaine, Menjot d'Elbenne, *op. cit.*, 70.

(11) E.Magne, *Ninon de Lenclos*, édition définitive, 1948.

(12) Boileau, *Satires*, p.p. Ch. Boudhors, 1934, Notices et Notes, p.295; Boileau, *Satires*, p.p. A.Cahen, p.167.

さ。」(Satire X, v, 425-437)⁽¹³⁾……。これは M^{me} de La Sablière の死後、発表されたものであるが、Boileau の悪意には次のようないきさつがあるとされている⁽¹⁴⁾。1674 年に Boileau は、5^e Epître の中で M^{me} de La Sablière を諷刺して、

Que l'astrolabe en main, un autre aille chercher

Si le Soleil est fixe, ou tourne sur son axe;

Si Saturne à nos yeux peut faire un parallaxe ;⁽¹⁵⁾ (Epître V v,28-30)

と歌った。M^{me} de La Sablière は、「諷刺をしようと志すからには、扱う題材を知っていなくてはならぬ。太陽が固定して動かないという説を支持している人々は、太陽が軸の上をまわると主張する人々と同じなので、異なる二つの説ではない。」と注意してやり、第一、astrolabe は天体の高さを測る道具で太陽が固定しているかどうかを見るのに何の用もなさぬ。それに parallaxe は女性名詞であるとしてつけ加えた。Boileau はひどく恨んで、Satire X の、上に引用した節をかいたというのである。Boileau のような無知は当時普通のことと思われるので、この挿話は M^{me} de La Sablière の科学知識が相当のものであったことを示していよう。次に賞讃者の側から見てみると、Corbinelli は「彼女は最も広い最も確かな教養を有していて、ギリシャ語を完全に知っていた」⁽¹⁶⁾という。Racine のギリシャ語の知識が珍らしがられた時代⁽¹⁷⁾、これは確かにまれな知識である。このことは M^{me} de Sévigné も証言している。「彼女は私達が Virgile を読むように Homère を読むことが出来ます」⁽¹⁸⁾と娘に書き送っているのである。M^{me} de La Sablière を紹介した Mercure Galant の記事は、「文学上の著作についていうと、先だって私は、それをすばらしくよく判断する女性のところにいました。……彼女は数ヶ国語を理解し、それよりうまく云い廻すのは難しいという詩をつくります。だから、アカデミー・フランセーズの大方の著名人も著作を世に問う前に彼女の意見を求めることを馬鹿らしいとしないのです」⁽¹⁹⁾と述べている。

Charles Perrault は「特異な才能と多くの機智とを有する夫人」⁽²⁰⁾と評している。その名声は国外にも広がっていて、1685年9月、P. Bayle は *Nonvelles de la République des Lettres* の中で「M^{me} de La Sablière は並はずれた頭脳の持主としてどこでも知られている。(彼女に著書 *Doutes* を捧げた大哲学者の Bernier 氏は、) 著作の冒頭においた名前を彼の作品が不滅にするよりも、その名前の方が作品を不滅にしてくれることを疑っていない」(*Oeuvres diverses*, t. I, p. 374) といっている。また Fontenelle によって書かれた *Eloge de Sauveur* の中では、有名

註 (13) Boileau, *Satires*, p.p. Ch. Boudhors, p.97 (*Epître V v,28-30*).

(14) P. Clarac, *Boileau* (Les Grands Auteurs Français, Ed. Mellottée), p.215, n.4.

(15) *Boileau, Epîtres*, p.p. Boudhors, p.29.

(16) A. Adam, *Histoire de la Littérature française au XVIIe siècle*, t.IV, p.37.

(17) voir Knight, *Racine et la Grèce*.

(18) M^{me} de Sévigné, *Lettres*, (Bibliothèque de la Pléiade), t.II, p.315, lettre 509 Au comte de Bussy Rabutin et à Madame de Coligny, A Livry, ce 30e juillet 1677.

(19) Menjot d'Elbenne, *op.cit.*, p.67.

(20) *Ibid.*, p.70, note 5

な数学者 Sauveur が彼女の支持によって名を成した事実をあげ、「彼女がいかにあらゆる異った精神をよく感じる力があつたかを証明した」⁽²¹⁾とその功績をたたえている。「彼女はただ文学者であるだけではなかった。彼女の精神は哲学の原理にも科学現象にも熱意をもって開かれていた。彼女はひそかにもっとも著名な数学者の授業も受けた」⁽²²⁾ という Menjot d'Elbenne の意見は充分証明される。

∴

ところがこの女性が学問探求や第一級の学者、文学者との会話におくった10年間以外の生涯を一瞥する時、私達は17世紀市民階級の女性の周囲にめぐらされていた暗い厚い壁につきあたらざるを得ないのである。後の M^{me} de La Sablière, Marguerite Hessein は1640年 Gilbert Hessein の長女として生れた。祖父は Henri IV の Valet de chambre だったが、父は金融に携わったり、商取引をしたりして財産をつくった人である。14才で、前にのべたように大財産家の次男に嫁した。夫は浮気者であったが、とに角13年間は平穏な結婚生活をおくり一男二女をもうけた。ところが夫人の父 Gilbert が多額の借財を残して死ぬと夫は彼女を苛酷に扱い、別居を願い出ることを強制して彼女を修道院へとこめた。別居の条件には、三人の子を手放すことも含まれていた所以夫人は長い間反抗したが、諦めて別居と財産分離を申請、三人の子を夫に委ねた後、1669年7月、一人 Neuve Petit-Champs の住居に移った。やがてパリーの知的サロンとなった住居での生活がこうして始まったわけであるが、1668年4月14日に彼女の提出した Protestation は夫が、気質の不適合を理由に強制的に彼女を修道院へやったこと、しかし14年もの結婚生活の実績があり三人の子まであり、このような苛酷な扱いを受けるどんな理由も夫に与えたことがないことが訴えられている。⁽²³⁾ 裁判の結果、持参金の3分の2が利子と共に彼女に返されることになったが、夫の死までは子供達との往来もなく、長女の婚礼には列席も許されないという屈辱を受けねばならなかった。⁽²⁴⁾ 以上は Menjot d'Elbenne の詳細な研究に拠ったのであるが、著者はこのように、夫の勝手な気持だけで、一種の離婚が成立したとしている。これに対して、Emile Magne

(21) “Quelques Dames même aiderent à sa réputation, une principalement qui logeoit chez elle le celebre la Fontaine, qui goûtant en même temps M. Sauveur prouvoit combien elle étoit sensible à toutes les différentes sortes d'esprit.” (Fontenelle, *Histoire de l'Académie royale des Sciences en 1699 et les Eloges historiques*, 1724, p.383).

(22) Menjot d' Elbenne, *op.cit.*, p.72.

(23) “ledit sieur son mary l'a obligée d'aller demeurer dans le couvent et hospice de Charonne, est demeurée d'accord de sa pension et ly (sic) a mennée soubz le pretexte que leurs humeurs ne se pouvoient accommoder, quoy qu'il y ait quatorze ans qu' ilz soient pourvus pnr mariage, et qu' ils ayent trois enfans de leurdit mariage, et qu'elle ne luy aye jamais donné subject de la mal traicter comme il a faict.” (Protestations de Margurite Hessin, femme d'Antoine de Rambouillet, sieur de la Sablonnière (sic), contre les signatures exigées d'elle par son mari 1668, 14 avril, Menjot d'Elbenne, *op.cit.*, p.342).

(24) Menjot d' Elbenne, *op.cit.*, 57.

はその *La fin troublée de Tallemant des Réaux* の中で、「夫人の方も同じ位浮気者であった。」⁽²⁵⁾とされているが、何ら証明は提出していない。Louis Roche は、「一体何事が起ったのか。誰しも見抜くことである。夫が（浮気の）模範を示したので、若い妻も或日自分の心の云うことをきいたのであろう。そこで夫権という味方を持つ La Sablière 氏は、この母親を子供達からひきはなしたのだ」⁽²⁶⁾と云っているが、これも証拠はない。こんな説が出る程、この一方的迫害は後代の理解をこえたものであったらしいが、理由はいずれにしろ、法律は全く女性の味方ではなかったことは明らかである。また一方、公然の情人を持つことが普通であった大貴族とは、夫も妻も全く異った道德信条に生きていたこともうかがえる。別居後数年して、娘の結婚に際して M^{me} de La Sablière が夫に与えた手紙は彼女の考えをよく現わしている。彼女は娘の結婚について夫の選択に同意し、「何故なら、あなたは凡てのことをもっともよくおやりになると確信しておりますから。」と云い、「私の子供達についての一切をすっかりあなたの導きに委ね、また私はあなたがお望みになる一切のことについて決して従順にもとることがない」⁽²⁷⁾と信じて下さるようにと願っている。こうして実際の記録は、M^{me} de La Sablière の強い孤独な生活と、従順な性格を示すのみである。更に有名なサロンの女主人公としての年月の間も、彼女は賢く理性的に暮っていたようで、最近発見された Guillerague の、夫人宛の手紙にも《votre livre de raison》⁽²⁸⁾という言葉があり。この見方は一般に広く受入れられていて、La Fontaine も《Si j'étais sage...si j'avais un esprit aussi réglé que vous》と歌っているという。夫や子供を離れて数年後、彼女の愛した唯一人の人は、La Fare であったが、この恋人に裏切られると彼女は現世に絶望して、⁽²⁹⁾痲疾者救済院で病人の世話をしながら徐々に陰遁生活に入り、癌で亡くなるまで、再び monde を省みようとしなかった。この頃、魂の指導を受けていた Rancé 師にあてた

(25) “Délaissée, Mme de la Sablière, d’humeur aussi volage, avait entendu les douceurs que lui prodiguaient maints mourants. Souhaitant une liberté qui lui permettrait d’aimer à sa guise, elle avait obtenu du Châtelet, sensible à ses requêtes, séparation de biens et d’habitation. (E.Magne, *La fin troublée de Tallemant des Réaux*, 1922, p.312).

(26) L.Roche, *La Vie de Jean de La Fontaine*, 1913, p.239.

(27) “Je ne doute pas que la personne à qui vous songez pour cela n’ait les qualités nécessaires pour la rendre heureuse. Et après les soins que vous avez pris pour cela, il serait inutile que j’examinasse rien après vous, puisque je suis persuadée que vous ferez tout pour le mieux. Je vous supplie donc très humblement de croire que je ressens comme je dois les soins que vous avez pris pour cela, que je me remets entièrement à votre conduite sur tout ce qui regarde mes enfants, et que je ne manquerai jamais de soumission pour tout ce que vous pourrez souhaiter de moi.” (L.Roche, *op.cit.*, Appendice, p.403).

(28) Deloffre, *Guilleragues épistolier: une lettre inédite à Mme de La Sablière*, *Revue d’Histoire littéraire de la France*, 1965, p.595.

(29) “Mme de La Sablière est dans Incurables, fort bien guérie d’un mal que l’on croit incurable pendant quelque temps, et dont la guérison réjouit plus que nulle autre. Elle est dans ce bienheureux état; elle est dévote et vraiment dévote; (Lettre de Mme Sévigné à Mme de Grignan, 21e juin 1680, Mme de Sévigné, *op.cit.*, t.II, p.753).

手紙には、「自分を現わしすぎた後で、今はかくれるべきです。」⁽³⁰⁾とか、「自分の過去の生活には、嫌悪なしに目をむけられない」⁽³¹⁾とか、「私の思い上りは常に悪魔のそれのようでした。そして世間がそれに気付かないほど巧く隠していただけ一層そうでした。世間には私は慎ましく謙虚だと思われていたのですから」⁽³²⁾といった言葉が多く。この時期には手仕事とお祈りだけに日を過していたという。⁽³³⁾

こうして実生活の面では、輝かしい知的探求の10年間の前にも後にも、びくとも動かない偏見の巨大な塊しか見出すことは出来ないのである。前には、強力な夫の権利に家庭内の一番上の奴隷として従うことしか出来ない女性の姿しかなく、その後には、神の御許でこの10年間の生活を否定する信者の姿しか見られないのである。社会という大きな壁の中の実生活と、宗教という同じく厚い壁の中の精神生活との間で、この17世紀の女性が興味の赴くままに没頭出来た知的探求の時間は、自由な空気の流れるわずかな隙間のような空間にすぎないのだろうか。やがて M^{me} de Lambert に希望をあたえるこの理想の才能も、社会の壁を打破らないという条件でやっと黙認されているかばそい流れにすぎなかったのだろうか。しかし一部の人々は既に、女性達の知識に対するこの欲求を採用して、旧い観念と、それに対立するこの動きをできるだけ調和させながら、新しい流れを受入れようとしていたのではないだろうか。

∴

確にこのことは、M^{me} de La Sablière の学問を賞める賛成者の言葉そのものによっても証明出来ると思われる。Menjot d'Elbenne は、Charles Perrault の、「彼女が少しも知識をひけらかさず、天賦の才を持っているという長所と共にそれをかくす配慮を人々は同じく尊んだ⁽³⁴⁾」という批評を紹介しているが、彼女の賞讃には常に知識をかくす女性らしさの強調が附加されているのである。l'Abbé d'Olivet も同様に「彼女は詩を好み、哲学を好んだ、しかしひけらかさずに」⁽³⁵⁾と評判を伝えており、Roche は、当時云われていた批評をまとめて、「陽気で飾り気がなく、善意にみちてやさしく（何と Philaminte（女学者）から遠いことか）、繊細な魅力と非常に高い理性を備えたすばらしい女」⁽³⁶⁾と云っている。このように、女性に課せられた、知識をかくすという美德を伴ってはじめてその知識欲が許されたいのである。 *La Femme et la vie spirituel-*

(30) Menjot d'Elbenne, *op.cit.*, p.284.

(31) *Ibid.*, p.329.

(32) *Ibid.*, p.182.

(33) *Ibid.*, p.184.

(34) Menjot d'Elbenne, *op.cit.*, p.96.

(35) "Elle se plaisoit à la Poësie, et plus encore à la Philosophie, mais sans ostentation."
(*Histoire de l'Académie françoise depuis 1652 jusqu' à 1700 par M.l'Abbé d'Olivet*, 1730, p.218).

(36) L.Roche, *op.cit.*, p.244.

le⁽³⁷⁾の著者は、この時代の女性の著作について研究し、「社交界の女性も宗教界の女性も極度の慎ましきを持っており、非常に厳正に匿名をまもったのである」⁽³⁸⁾と述べているが、まさに知的探求は大目に見られていたにすぎないのであり、M^{me} de La Sablièreはその実生活の淋しさ故に大目にみられたものであろう。Bernier は人種研究を彼女に教えるにあたって、「かまうものか、それがほんの小半時でもあなたを孤独のかげからひき出せるものなら」⁽³⁹⁾と云っている。M^{me} de La Sablière が女性に課せられた謙虚の徳を守りながら、できるだけ知識を得たいと努力した点、女性の学問という問題の発展への一つの進み方を見ることができ、M^{me} de Lambert へ続く系列を認めることができるのである。尤も彼女が個人的には、このつつましい知的探求さえ、謙虚を装った傲慢として否定するに至るのは、この流れからの離脱と見なさねばならない。一つの主義主張をもって女性擁護を志した貴族女性達 (Précieuses) とは、M^{me} de La Sablière は自身の女性観において異っていたのは明らかで、これは Menjot d'Elbenne も力説している。⁽⁴⁰⁾ が一方、女性らしさと知的能力の一致を人間の最高のものとする考え方も、この時代以後の或知的グループに共通した理想として存在していて、M^{me} de La Sablière は意識してその理想を表現しようとしたとも考えられる。その共通な観念は、一体何時頃発生して、どのような支持者を得て受けつがれて行ったかは、今の段階では明らかでないし、紙数も詳述を許さないが、あまり宗教的でない文学者の間に、その例が多く見られるということも事実である。例えば、M^{me} de La Sablière の心酔者 La Fontaine は、最上のはめ言葉として、《A beauté d'homme avec grâce de femme》⁽⁴¹⁾と云っている。また Saint-Évremond は、理想の女性像を描いた後で、「以上が絶対いない女性の描写です。……むしろ完全な人間の観念です。私はこれを男達の間には探そうとしません。というのは、女達の交際で出会う、云うに云われぬやさしさが男達との交際にはいつも欠けているからです。女達に自然に備わった魅力と快よさをもった男を見つけるより、男達に比べても最も強く正しい理性をもった女を見つける方が、まだしも不可能でないと思っています」⁽⁴²⁾と結んでいる。これが M^{me} de Saint Pierre について書かれたものらしくて、M^{me} de La Sablière のことではないという事実⁽⁴³⁾は、こうした理想像が相当広い範囲に存在したことを示すと思われる。

(37) Gueudre, *La Femme et la Vie spirituelle, XIIe Siècle*, 1964, Nos 62—63, p.47.

(38) “De plus, femmes du monde et religieuses sont d'une modestie excessive et gardent un très strict anonymat.” (*Ibid.*, p.47.).

(39) Menjot d'Elbenne, *op.cit.*, p.93, note 3.

(40) par exemple, “Elle n'était pas précieuse, et son savoir ne nuisait point à son charme” *Ibid.*, p.60—70.

(41) La Fontaine, *Fable* XII 15.

(42) “Voilà le portrait de la femme qui ne se trouve point, si on peut faire le portrait d'une chose qui n'est pas. C'est plutôt l'idée d'une personne accomplie. Je ne l'ay point voulu chercher parmi les hommes, parce qu'il manque toujours à leur commerce je ne sçay quelle douceur qu'on rencontre en celui des femmes; et j'ay crû moins impossible de trouver dans une femme la plus forte et la plus saine raison des hommes, que dans un homme les charmes et les agréments naturels aux femmes.” (Saint-Evremond, *Oeuvres en prose*, p.p. R.Ternois, t.II, p.53).

(43) *Ibid.*, pp. 38—45.